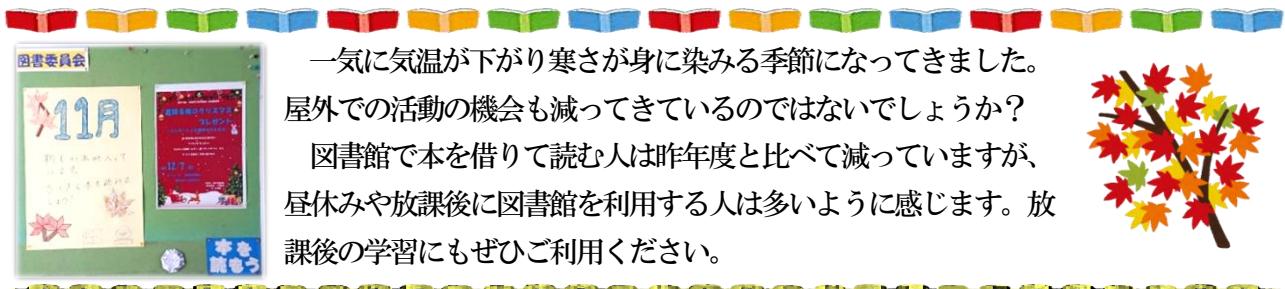


図書館だより 11月号 (令和7年度)

川之石高校図書委員会



【新任の先生】

『みえるとか みえないとか』(ヨシタケシンスケ著)

福祉科 渡部 祥平 先生



“ヨシタケシンスケ”という絵本作家をご存じでしょうか。私が彼の作品に出会ったのは、子どもが学校の図書室で借りてきたことがきっかけでした。「お父さんも読んでほしい」とすすめられ、軽い気持ちでページを開いたところ、大人でも思わずうなずいてしまうような深さとユーモアに、すっかり引き込まれてしまいました。

今回紹介したい本は、伊藤亜紗さんの著書『目の見えない人は世界をどう見ているのか』をもとに、ヨシタケシンスケさんが伊藤さんと相談しながらつくった作品です。伊藤さんは、「障がい者」という一つの側面だけで人を見るのではなく、その人の中にある様々な役割や表情に目を向けることが大切だと語っています。

私自身、教員になる前は福祉の現場で働いており、利用者さんを「障がい者」「高齢者」といった枠で捉えるのではなく、「○○さん」として、その人らしい生活や人生に寄り添うことを大切にしてきました。「障がいは個性」という捉え方もありますが、私は、そもそも人は生まれながらに皆違い、得意なことや不得意なことがあるものだと思っています。だからこそ、お互いを知り合い、自分らしく暮らしていくように支え合えば、誰もが過ごしやすい社会になるのではないかと感じています。これは福祉の世界だけでなく、日々の学校生活や友人関係にも通じることですね。

ヨシタケさんの絵本には、多様な見方や発想がユーモアたっぷりに描かれており、読んでいると「こんな考え方もあるんだ」と視野が広がります。子どもたちは笑いながら読み、自分ならどうするかと想像をふくらませ、大人は凝り固まった考えがふっとほぐれるような感覚を味わえます。気になった方は、ぜひ手に取ってみてください。友人や周囲の人の“新しい一面”に気づくきっかけになるかもしれません。



〔新刊紹介〕



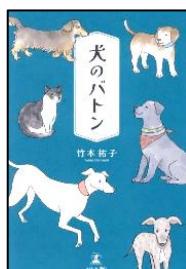
『エミリの小さな包丁』(森沢 明夫 著)

恋人にだまされ、仕事もお金も居場所さえも失った25歳のエミリ。15年ぶりに再会した祖父の家に逃げ込んだものの田舎の暮らしになじめない。しかし、淡々と包丁を研ぎ、食事を仕度する祖父の姿を見ているうちに、小さな変化が起り始める。

「毎日をきちんと生きる」ことは、人生を大切に歩むこと。人間の限りない温かさと心の再生を描いた物語。

『キラキラ共和国』(小川 糸 著)

亡き夫からの詫び状、憧れの文豪からのラブレター、大切な人への遺言……。祖母の跡を継ぎ、鎌倉で文具店を営む鳩子のもとに、今日も代書の依頼が舞い込みます。バーバラ婦人や男爵とのご近所付き合いも、お裾分けをしたり、七福神巡りをしたりと心地よい距離感。そんな穏やかで幸せな日々がずっと続くと思っていたけれど。



『犬のバトン』(竹本 祐子 著)

愛犬とともに駆け抜けた40年、愛と絆に彩られた日々。

愛犬家であり、翻訳家であり、酒造家であった著者がつづる、20代後半から70歳手前まで、これまで一緒に過ごした愛犬たち(猫も一匹)とのかけがえのない日常。そして心をつなぐ、愛犬たちと家族の愛と絆のエッセイです。

〔10月 月間図書貸出冊数〕

〈クラス別〉

10月1日～10月31日

1-1	1-2	2-1	2-2	3-1	3-2	3-3	合 計
5冊	0冊	7冊	8冊	2冊	6冊	0冊	28冊

〈個人別〉

- 1位 6冊 宇都宮 妃南 (3-2)
- 2位 4冊 吉本 陽向 (2-1)
- 3位 3冊 菊池 心希 (2-2)
- 3冊 滝水 万尋 (2-2)



「あなたが絶対に知るべき唯一のものとは、図書館の場所である。」

アルベルト・aignシュタイン

(ドイツの物理学者/1879~1955)